

この通信、優しく哲学の説明をしたいと思っっているのですが、いつも難しくなります。受験を目前に控えたみなさんの頭を混乱させたり破壊したりしてはいけないので、興味がない人は読まないで結構です。ただ、ファイルに保存しておいて、いつか大人になって考えることが出てきたときにでも読んでください。それから、早く寝たいのに眠れない夜には、これを読むと睡眠薬の効果があると思います。

前回、近代の哲学を始めた人としてデカルトの他にベーコンという人を紹介しました。覚えやすい名前ですね。デカルトはフランス人ですが、ベーコンはイギリス人です。人それぞれ性格というものがあるように、各国民もそれぞれ固有の性格を持っているようです。だから、むかしから様々な交流によって互によく知っているヨーロッパの国々は、それぞれの国民の性格をよく冗談の種にします。

ともかく、フランス人とイギリス人はかなり性格が異なり肌が合わないところもあるようです。ヨーロッパ共同体の前身、欧州経済共同体の創設者の一人フランスのドゴール大統領は、一緒に入れてと頼んでいたイギリスの加入を最後まで許しませんでした。イギリスは、ヨーロッパ共同体の国々がユーロという統一通貨を採用しようとしたときイギリスはそれには加わらないという姿勢をとり続けました。

哲学においてもこの両国は対照的です。デカルトが代表するフランス（そしてドイツなども）では、まず根本的な原理を見つけ、その原理を個々の事例に当てはめようとしています。例えば法律で言えば、まず憲法を作って、それから憲法の各条項を具体的にする他の法律を作るという手続きを踏みます。これに対してイギリス人は、まず目で見て耳で聞いて知る事実から出発して、後でそれらをまとめる法則を見つけようとしています。イギリスには憲法というものがなく、個々の裁判の判決や議会の議決が法律になっていきます。このようにイギリス人は一つ一つの経験から出発して、物事を考えていくと言えるでしょう。

ということで、デカルトの哲学はイギリスではあまり根を下ろさなかったようです。1728年にイギリスを訪れたフランス人、啓蒙思想家として有名なボルテール（1694~1778）は「イギリスではデカルトはまったくすたれてしまっている」と驚いたそうです。ではイギリスではどういう哲学が支配的であったのか。それはやはり一つ一つの事実から出発しようとする哲学でした。それを経験論（empiricism）と言います。そのきっかけとなったのがベーコンですが、経験論の代表者は、ご存じ『市民政府二論』で有名なジョン・ロック（1632~1704）です。彼は実は医者で、かつ哲学者でもありました。彼が生きた時代はイギリスでは清教徒革命と名誉革命という大きな変化があった激動の時代でした。

前回言いましたが、近代になって哲学の流れが大きく変わります。この新しい哲学の特徴の一つは、「人間の知る能力（認識力）はどこまであるのか」、言い換えれば「人間は何を知り得て、何を知り得ないか」という認識論に非常にこだわったことが挙げられます。もちろん、それ以前も人間が何を知ることができるか、知るとはどういうことかという問題はちゃんと議論されてきました。しかし、人間が外の世界を知ることができるという点は誰も疑わなかったのです。そのことさえ疑うべしと主張したデカルトは、ついにこの世界があることも証明しなければならないことになり、歴史上初めてその不思議な証明を手がけたのです。



さて、近代哲学のもう一つは、学問の知識と呼び得るものはあいまいであるべきではなく、すべて「数学のように正確でなければならない」とする点です。これは古代と中世では、学問を対象によって分け、人間に関する学問では「おおよそのことがらを、おおよその出発点から論じて、同じくおおよその帰結に到達するならば、それをもって満足しなければならない」（アリストテレ

ス、『ニコマコス倫理学』)と考えたのと大いに異なります。

さて、ロックも「人間が何を認識できるか」という問を立てます。こうして『人間悟性論』(1690年出版)という本を出しました。この中で彼が批判したのがデカルトの説です。つまり、デカルトは人がすべてを疑った後で、どうしても疑えない事実として、「私が存在する」ということを挙げて、それから他の真理を演繹(原理から導き出すこと)していく方法をとったのですが、そのためには、誰もが生まれつきいくつかの概念を持っているとしなくてはなりません。例えば、「在るものは在る」とか「同一のものが存在し、かつ存在しないということは不可能である」だけでなく、さらに「神が存在する」という概念を持っているとしました。ロックはこれを否定します。「だいたい幼児や知的な障害のある人は、いやそれどころか多くの正常な一般人でさえ、一生それらの原理を知らずに死んでいくではないか」と言うわけです。

では、そういった知識はどこから来るのか。ロックはそれは「感覚と反省からもたらされるのじゃ」と主張します。つまり、「人間は生まれたときは何も知らん。その知性は白い板で、その上に経験によって字を書いていくのだ」と説明します。この「知性は白い板 *tabula rasa*」と最初に言ったのはアリストテレスです。ただ、根本的なところで大きな違いがあります。と言うのは、ロックやそれに続く経験論者は、「我々が感じることと現実は同じとは言えない」と言うのです。例えば、雪を見て「白い」と感じるが、それは「目の網膜が光線を受けて白のように感じるだけで、本当に雪が白いのかどうかはわからん」と言うのです。この考えを極端に表すのは、パークリー(1685~1753)の「在ることは、知覚すること *To be es to be perceived*」という表現です。言い換えると、「雪が白いから目は白いと知覚するのではなく、目が雪が白いと知覚するから、雪が白いのじゃ」となります。まさに主客転倒。

それに対して、古代中世の哲学は、目が色を、耳が音を、舌が味を感じる時普通は誤らないとします。すなわち、もし感覚器官が正常であれば、外の世界をそのまま映し出す、と主張します。彼らも例えば色弱の人が色を見分けられない、錯覚や空耳ということがあつた、あまりに冷たいものに触れると熱いと感じる、などなど感覚が間違えるケースがあることを認めます。しかし、それは珍しい例外です。普通は感覚は間違わない。でなければ、体育祭の色分けのとき青を見て赤だと言う人がいて、色分け事態が不可能になるでしょう。また信号も信じられなくなります。でも、こういう不安で生活できなくなった人はいません。みんな常識に従って、誰もが同じようにこの世界を見ていると思っている。だからある程度安心して生活できるのです。

経験論のもう一つの大きな欠陥は、一つ一つの具体的な事実を拾い上げる点はよいのですが、人の認識力を経験(感覚)だけとしたため、そうして集めたデータから一般的な法則を作り出すことができないという点です。例えば、緩やかな斜面に丸い玉を転がす実験があります。1秒後に1メートル、2秒後に4メートル、3秒後に9メートル離れていくという実験結果を得ると、それでは玉が進む距離 $Y$ は、時間 $X$ の二乗、すなわち $Y = X^2$ となるのですが、もし経験(感覚)でしか知識を得ることはできないという経験論者の主張に従うなら、4秒後、5秒後・・・と、それぞれ経験で確かめられない限りわからないとなる。そうなる一般的な法則を出すことは不可能です。一般的な法則は、感覚では出すことは無理で、どうしても知性に頼らねばならないのです。

そこで、経験論では哲学だけでなく、あらゆる学問が不可能となります。しかし、この頃ニュートンを始め自然科学がめざましい発展を遂げていました。そこで、なぜ自然科学が可能なのかを説明しないといけなかつたのがカントという人でした。